

旭塚古墳と城山古墳群



▲旭化成寮（社宅）内に50年近く保存されて市民に親しまれてきた旭塚古墳の墳丘と石室の旧観（2006年2月）

1 古墳の位置

市街地の西部、阪急芦屋川駅から北へ向かう、芦屋川西岸にそって山麓部に至る斜面の登り道は、表六甲の城山しろやまや高座こうざノ滝へのハイキングコースになっています。途中、二またに分れる道の左側をたどり、大きく西にまわりこむとその右手にはこんもりとした盛土もりつちと大きな石室せきしつが残っています。ここにはかつて、民間会社の社宅がありました。これが旭塚古墳です。所在場所は、芦屋市山芦屋町23番地です。

大昔に造られたお墓のうち、土が高く積みあげられたものを「古墳」と呼んでいます。そして、盛んに古墳を築いた時代を「古墳時代」と名づけています。市内にはかつて数多くの古墳がありましたが、現在見ることのできるものは、この旭塚古墳を含めて5基ほどです。



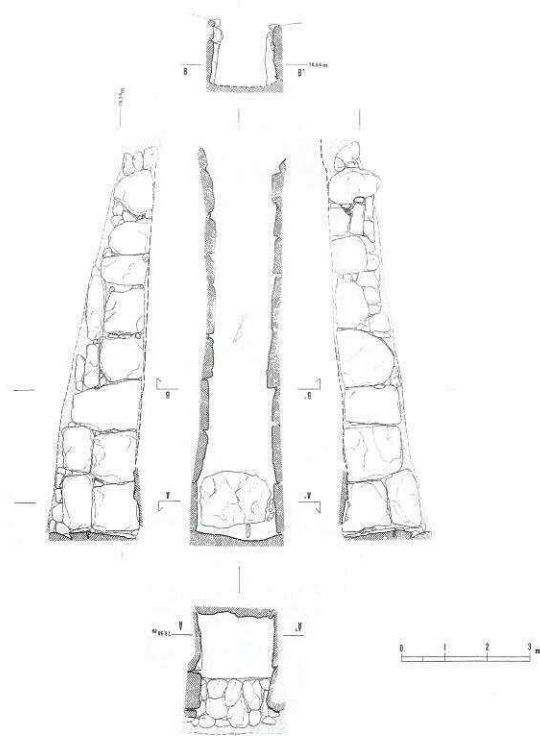
この周辺は、昭和のはじめ頃には100基近くの横穴式石室が群がった状態で存在しており、付近一帯は、渡来系氏族たちが6～7世紀の古墳時代の終わり頃に共同墓地にしていた所です。このあたり全体を「城山古墳群」と呼んでいます。戦後の宅地開発などにより9割近くの古墳は埋没したり、その形をすでに失ってしまいました。



▲旭塚古墳の墳丘を囲む調査員（2006年8月、確認調査中）



▲奥壁上よりみた石室全景。
1m以上の花崗岩が使用されています。
天井石は残っていません。



(武庫川女子大学考古学研究会 1984 から)
▲旭塚古墳の石室平面・立面図

2 古墳のようす

旭塚古墳は昭和 36 年 2 月、社宅の増築に伴い京都大学考古学研究室が発掘調査を実施しました。旭塚という名の由来は、「旭化成寮」に基づいています。

この古墳は、城山古墳群中の一古墳です。昭和 52 年に発掘された山芦屋古墳の東約 100 メートルの所にある横穴式石室墳で、長い間、社宅の中庭に保存されてきました。市内で唯一、石室古墳の構造を間近で見学できる遺跡としてよく知られた存在です。

阪神間では最も大きな石室で、大型石材を用いる古墳時代終末期の巨石墳として考古学上、貴重な存在です。これまで高座ノ滝方面への登山路の入口近くに位置しているため、ハイカーや考古学ファンの見学の場となっていました。

3 石室の形は両袖式

中に入って石室の形態をみてみましょう。羨門せんもんと呼ばれる入口から入っていきます。入口を南に向けた両袖式りょうそうしきで、通路状になっている羨道せんどうを進むと、左右両側に幅が若干広がる奥の部屋げんしつ（玄室）があります。着物の袖のように左右に広がります。

大きさは、全長 11 メートル、玄室の長さ 4 メートル、玄室の幅 1.8 メートル、羨道の幅 1.6 メートル、

現存の高さ 2.2 メートルです。天井石は一枚もありませんでした。

組まれた石材は、大部分が大きな花崗岩で、中に入って入口側を見ると、大きな石室独特の威圧感が伝わってきます。石室の奥の部屋に相当する玄室には、粘土まじりの土でつくられた固い床面が認められます。残存していた遺物（副葬品）は、きわめて少なく、過去に盗掘を受けた形跡があります。



4 方墳の可能性

石室の入口せんもん両側には珍しい石垣状の列石がみられ、直線状に延びていますので、墳丘の形態は円墳よりも方墳の可能性が高いと考えられています。上から見ると、正方形ないし長方形の形と推定されています。今後の発掘の成果でわかります。

5 出土した遺物

発掘で出土した遺物は、須恵器が高杯・杯蓋など数点と鉄鏃^{てつそく} 1本であり、現在、京都大学考古学研究室に保管されています。また、近辺で台付長頸壺^{だいつきちようけいぼ} 1点が出土しています。築造された時期は、須恵器の年代や石室型式から7世紀の中頃と思われます。

6 旭塚古墳の価値・意義

平成19年(2007)現在、兵庫県下の古墳は、18,351基存在します。その中でも旭塚古墳の横穴式石室は、屈指の規模を誇るもので、数多くの書物に紹介されています。古墳の被葬者(埋葬された人)は、この地方の有力な豪族で、おそらくこの群集墳を形づくっていった氏族の指導的な立場の人物であったと考えられます。発掘調査や測量調査はまだ部分的なものであり、今後本格調査を実施して、基礎構造を解明します。



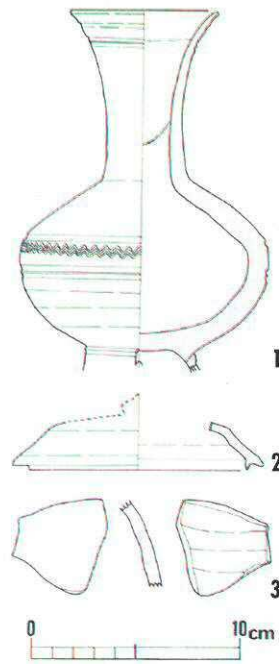
▲旭塚古墳の玄室奥壁。下の巨石は原位置ですが、上の部分は石材を積みなおしています。

7 城山古墳群の広がり

旭塚古墳を含む城山古墳群は、六甲山地^{さんろく}に広がる芦屋台地の芦屋川と高座川にはさまれた城山(鷹尾山)南斜面に分布する古墳群で、大正~昭和初期からその存在が知られていました。

竈形土器^{かまどがた}を出土する古墳や多角形の城山3号墳、天武朝期の城山18号墳、県下最大の石室幅(3.15m)を有する山芦屋古墳も存在しています。戦前にはこれらを含む62基の古墳が記録されていました。

この古墳群は「群集墳」として、今から1400年前の古墳時代後半期の社会構造や親族構造、氏族関



旭塚古墳出土土器

(武庫川女子大学考古学研究会 1984 から)

係を解き明かす有力な考古資料で、その構成そのものが歴史を物語るため、できるだけ多くを後世に残していく必要があります。

8 群集墳の増加と渡来系氏族の活躍

芦屋川の流域から神戸市の住吉川の流域にかけては、大和政権が招来した朝鮮半島からの渡来人がたくさん住んでいた所で、5~6世紀の集落の構造や住居の施設、所持した物品にそのことを示すものが数多くみられます。彼らの「奥津城」の1つが城山古墳群であり、その築造開始は6世紀前半にさかのぼり、7世紀の末頃まで群集墳として共同墓地の形成が進みます。こうした渡来系集団^{とらいけい}の成立、発展を基礎として、やがては芦屋廃寺など古代寺院を建立する有力豪族がこの周辺に出現したと考えられます。

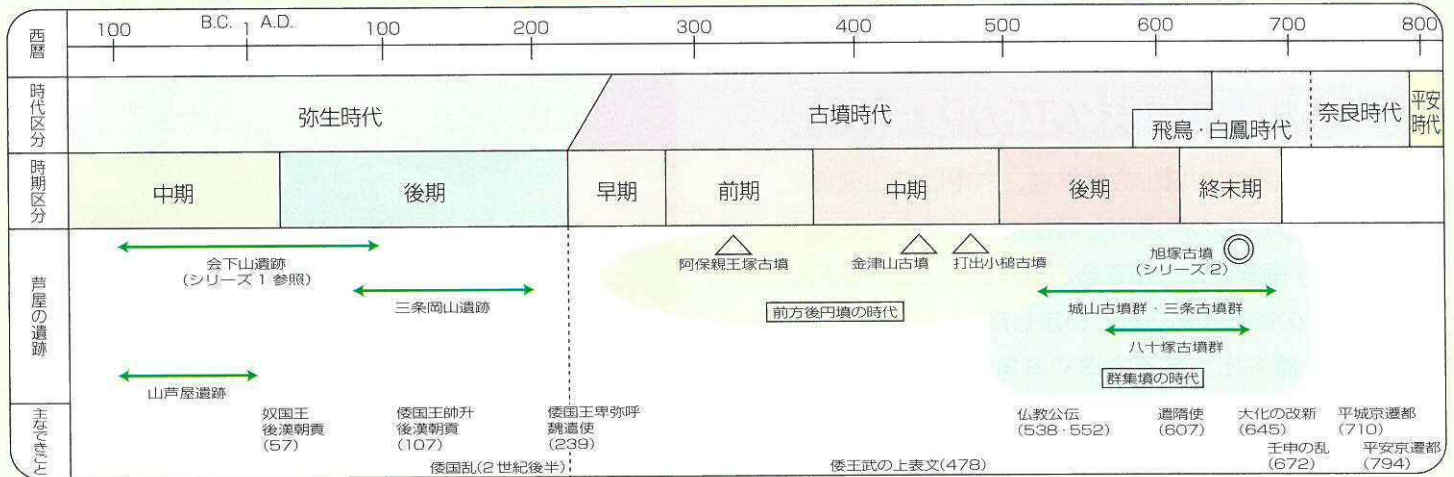


▲羨門部より石室全体をのぞむ。

パンフレットを読むための用語解説

- 古墳** ● 埋葬のために土を盛って高く積み上げられたお墓。日本の古代に数多く造られました。全国に約15万基の数が築かれています。
- 盛り土** ● 人の力によって地面に土を盛ること。古墳の墳丘もその一つです。
- 石室** ● 石材を用いて築かれた部屋(墓室)のこと。多くの国々にみられ、世界的に存在します。
- 墳丘** ● 古墳の形態をなすように、固く土を盛られた部分のことです。
- 渡来系氏族** ● 土着の倭人とは異なり、中国・朝鮮から日本海をはるばる渡って日本列島にやってきた氏族のことです。さまざまな技術・技能をたずさえてやって来ました。
- 古墳群** ● 古墳の群れをグループとしてとらえて名称をつけたものです。
- 古墳集** ● 古墳群の一つで、主として同形態、同規模の古墳がきわめて密集して築かれるものを呼びます。古墳時代後期を中心に数多く造られました。有力な家族墓の集合と考えられます。
- 古墳時代** ● 日本列島で古墳が多く築かれた3世紀中頃～7世紀初頭の頃を「古墳時代」と呼び、考古学上の時代区分として用いられています。前期・中期・後期に細分されたり、さらに早期と終末期を区分して5期区分されたりすることもあります。その場合、旭塚古墳は、最も終わりの「終末期」に属し、古墳時代が終わろうとする頃に築かれました。
- 奥津城** ● 古語で「墓場」のことを指しています。『万葉集』や『続日本紀』など、古典籍に登場します。
- 玄室** ● 横穴式石室の奥の部屋。畿内のは通常長方形です。第一埋葬者が葬られる空間で、しばしば大きな石棺なども安置されます。天井も羨道より一段高くなるのが普通です。
- 羨道** ● 横穴式石室の通路部分にあたり、玄室に通ずる道のことで、追葬棺の置き場所になることもあります。近畿地方では少しずつ長くなっていきます。
- 袖** ● 横穴式石室の玄室と羨道の仕切り部分。着物の袖になぞらえて両袖・右片袖・左片袖などの区分があります。左右は奥側から入口に向かって統一的に表現します。
- 両袖式** ● 左右両方に袖をもつ横穴式石室の型式。6世紀を中心に造られ、7世紀にも存在します。
- 山芦屋古墳** ● 個人住宅内に地下保存されています。見学はできません。県下最大の石室幅を誇ります。

芦屋市内旭塚古墳周辺略年表



編集
発行

芦屋市教育委員会社会教育部生涯学習課

〒659-8501 兵庫県芦屋市精道町7-6 電話 0797-38-2115 FAX 0797-38-2072